佐藤博信先生を送る

菅原憲二

佐藤博信先生が定年退職されることになった。同じ職場で、日本史の中世と近世という近い研究分野で二〇年あまりを過ごした者であるが、断片的なことしか思い浮かばず、まとまりのないまま佐藤先生の思い出を記すことをお許し頂きたい。

先生は、一九四六年一〇月に新潟県新発田市に生まれた。いわゆる団塊の世代に属する。早稲田大学第一文学部、同大学院博士課程単位取得後、女学校の教員を経て一九八〇年四月に千葉大学人文学部に助教授として赴任された。このときには現在の史学科はまだなく、人文学部人文学科の史学専攻であって僅か五名のスタッフであった。翌一九八一年四月に人文学部が改組され、文学部史学科が、日本史（考古学を含む）、東洋史、西洋史という形で発足したのである。その史学科発足時以来の教員として三〇年以上にわたって、研究教育に専念されてきた。

私が佐藤先生と初めてお会いしたのは一九八九年四月はじめであったと記憶している。柔らかい物腰と親しげな口ぶり、そして実験助手のような白衣を着ておられた。生活は質素で、酒もたばこも嗜まれず、研学一筋の生活であった。いつもゼミには多くの学生がいて、講義と演習を同じ日に連続して精力的にこなしておられた。史

料を博捜されることは言うまでもないが、既知の史料でも現物に当たる努力を惜しまれず、また同じ史料でも何度でも繰り返し丹念に読み込んでいくという真摯な取組を、我々職場の同輩のみならず、大学の講義の学生に、研究会の出席者たちに、印象づけておられた。

私は千葉大学に赴任するまで、佐藤先生のお名前を学会誌でお見かけはしていたが、実際に同じ職場に移って驚いたのは、論文の生産力の高さである。大学の講義では、すでに文章化されたものをゆっくり読み、それを学生にノートに書かせて、そのあと丁寧に解説をされるのである。学期が終わるとその内容の活字論文抜刷が直接あるいは文書箱に届けられる。それだけであれば年に二部程度の抜刷を受け取ることになるが、実際には先生から、お仕事の成果を拝受するのは毎月といってよかった。最近はその抜刷が重厚な著書に替って恵与されることになっていった。怠惰な筆者にはとても真似できないご精進であった。

先生の研究フィールドは、中世東国史の研究で、越後国を出発点として、着実にその視野を広げて、東国を中心とした地域の支配構造の研究、古河公方足利氏の研究を経て、政治的・経済的・文化的・宗教的状況に至るまでその総合的把握に努めて来られた。その主要な成果が『古河公方足利氏の研究』と『中世東国日蓮宗寺院の研究』である。一九九一年には早稲田大学から「古河公方足利氏の研究」で文学博士を授与されているが、そのことに決して満足はされておらず、ひたすら精進を遂げられた。そのため、一時健康を損なわれたように見えたときもあった。

先生は在職中に多くの学生を指導されてきた。指導された学生は五〇名以上におよぶ。その間、進学を目指した学生がいたときは、必ず他大学の大学院へと送り出された。可愛い子には旅をさせようとの指導方針であった

とも思われる。進学先は東京都立大学、一橋大学、広島大学、お茶の水女子大学、神戸大学などで、その大学数は九、進学した院生は一四名におよぶ。その姿勢は文学研究科、社会文化科学研究科など、千葉大学で進学できる学内の大学院が発足以降も変わらなかった。大学院が発足した以降、学外から受験者がいても、受け入れて指導することを躊躇されていたかのように私には思われた。そのような厳しい指導をされていたが、最後には直接の指導生の中に博士の学位を取得したものがいないことを残念に思われていた。

卒業論文試問では、いつも赴任以降（と思われる）の指導学生の卒業論文のメモを携えておられた。B5判の横書きの便箋にはびっしりとコメントが書き込まれていた。黒紐で綴じられた便箋の束は三〇有余年の歳月を物語るように分厚くなって、下の方は色が変わっていた。私とはゼミ生が重なることが多く、いつも中世史の卒業論文は読ませて頂いていたが、卒業論文本体には付箋が立ち並び、多くのコメントが記されていた。しかし、卒業論文試問では優しい口調であった。ただし学生を褒めちぎると言うことは滅多になかった。不幸にもゼミで使用した史料で卒論を書いた学生に対して、すでに同じテーマで論文を執筆していた先生がやさしく説明されていた姿も今は思い出である。

お母さん想いの先生の姿も忘れられない。体調のよくなかったお母さんを茅ヶ崎市から現在のお住まいに引取られる際にも、階段の昇降の負担を考えられて、大学に近い平屋の一軒家を選ばれたと聞いている。昼食時にも必ず自宅に帰られて食事の御世話をするなど、最後まで身の回りの世話に努めておられた。最期に近い頃は、ご自身にも必要な史料調査や、恒例となっていた学生引率の研修旅行・史料調査も慎んでおられた。しかしその姿を決して表には出されなかった。お母さんが亡くなられたあとには髪を短くされ、あたかも法躰の様相であっ

た。服喪以後のメールには今に至るまで「合掌」という言葉が止め文言となった。本に埋もれた研究室には、法華経かなにか読経が静かに響くようになった。二〇〇六年に中国に一緒に赴いた時にも、両手を合わせて挨拶をする先生の姿を見て、高僧をみるかのような中国の大学生の表情が印象的であったことを思い出す。

先生は現在、千葉歴史学会という、地域に根ざした在野の学会の会長をしておられる。この千葉歴史学会は、一九八二年に発足したから、赴任された直後になる。おりしも佐倉市に国立歴史民俗博物館が設立され、千葉圏域に錚々たる歴史関係者が揃っていた。事務局は当面文学部史学科に置くことになり、佐藤先生は発足時から事務局を務められ、長い間学会の屋台骨を支えてこられた。初代の会長は故小笠原長和先生、二代目は宇野俊一先生で、佐藤先生は三代目になる。歴代の会長は史学科の教員が勤めているが、会員は千葉県を中心にひろく関東地域の方々から構成されていて、外国史も含む多くの歴史研究者や歴史教育を担当する中高教員、さらに地域史に取り組む広範な人々からなっている。減少傾向がみられる多くの学会の中で堅実に会員を確保してきており、その活動は注目すべきものがある。この千葉歴史学会の順調な歩みは学会各委員の活動のみならず、先生の人徳・人脈と、努力に支えられていると言ってよい。特に中世史部会は、先生が中心になって研究活動や史跡見学を展開してきて、多くの成果を生み出し、同学会ではもっとも活発な部会となっている。また、県内の文化財保存運動にも積極的にも取り組んできているが、その先頭に立つお一人でもある。

先生が在職中の三二年間に史学科の組織は大きく変化していった。教養部が解体されたとき、史学科は相当数の歴史系教員を迎え入れ、一六名、三専攻(形式上)からなる大史学科へと変貌した。また大学院も文学研究科、社会文化科学研究科、人文社会科学研究科と発展的に存続してきた。その間、史学科の「有職故実」を知る存在

として重きをなしてこられた。学科長を二期勤められたのを始め、文学部の公職も教務委員長、学生委員長などを歴任された。学生委員長の時には文学部にとっても不名誉で大変な時期に御苦労をされた姿を見ている。

「行政改革」の名のもと、大学が構成員の意に反して法人化され、予算も人員も削減され、史学科（だけではない）は大きな影響を受けている。先生が史学科を去られる直前に日本近代史の安田浩先生が逝去され、また考古学の岡本東三先生が退職されるので、二〇一二年四月には大所帯であった史学科も一二名となる。来年度岡本先生の後任は補充されるが、佐藤先生の後任は菅原の後任と合わせて一人を補充する予定と聞いている。予定が実現したとして、日本史の専任教員は二〇一三年度からわずか二名となり、史学科の研究教育は非常にバランスを逸したものになってしまう。このような姿になることを、佐藤先生は案じながら去られることになる。こうなるとは、赴任された時には想像だにされなかったのではなかろうか。

業績目録（末尾のものはあくまで抜萃である）をみるまでもなく、佐藤先生の研究への精進は明らかである。既述のように中世東国史研究の第一人者として誰もが認める研究成果を持っている。しかし、先生は大学での通常の教育研究経費以外に、いわゆる競争的資金を全く受けてこなかった。科学研究費補助金申請は、研究代表者として提出したものはついに一度として採択されなかった。先生の膨大な実績と、長年の真摯な研究態度を考えるとこれは全く不思議なことである。一方で何らかの形で毎年のように科研費などを受けている研究者がいることをみると、科研費採択の不合理さ、理不尽さを思わざるを得ない。こうした中で申請を強制するかの如き近年の学内の動向は、運営交付金の削減が毎年のように行われている事情があるとはいえ、情けない？時代になったものと感じる。

最後になったが、文学部というか『人文研究』関係者にひとことお願いしたい。先生が千葉大学退職後も活躍されることは誰しも期待している。言うまでもないことであるが、大学の定年を迎えたからと言って、学問への情熱が、史料への取組が定年を迎える訳ではない。先生が今後も研究成果をものすることは当然である。しかし大学を離れた時、研究成果を発表する場はかなり狭くなる。おそらく先生は名誉教授に推薦されると思うが、何が名誉なのであろうか。秋の懇談会など会合へのご招待よりも、紀要掲載の権利を担保する方がよほど名誉になるかも知れないと思うのだが如何であろうか。本学の発展に努められた先生のような退職教員には本誌『人文研究』への投稿資格を付与してもよいのではなかろうか。早急なご検討をお願いしたい。

末尾となったが先生のご健康と今後ますますのご活躍を祈り上げる。

佐藤博信先生　略歴

一九四六年一〇月二六日生
一九六九年三月三一日　早稲田大学第一文学部史学科国史専修卒業
一九七一年三月三一日　早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了（文学修士）
一九七四年三月三一日　早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学
一九七五年四月一日　清泉女学院教諭
一九八〇年四月一日　千葉大学助教授人文学部
一九八一年四月一四日　千葉大学助教授文学部に配置換
一九九一年六月　文学博士（早稲田大学）
一九九三年四月一日　千葉大学教授文学部
一九九四年四月一日　千葉大学文学部史学科長（一九九六年三月三一日まで）
二〇〇三年四月一日　千葉大学文学部史学科長（二〇〇四年三月三一日まで）
二〇〇六年四月一日　千葉大学教授大学院人文社会科学研究科に配置換
二〇〇九年四月一日　千葉大学教授文学部に配置換

佐藤博信先生　研究業績目録

著書

		発行所	発行年
1	『中世東国の支配構造』	思文閣出版	一九八九年六月
2	『古河公方足利氏の研究』	校倉書房	一九八九年一一月
3	『続中世東国の支配構造』	思文閣出版	一九九六年一〇月
4	『江戸湾をめぐる中世』	思文閣出版	二〇〇〇年七月
5	『中世東国日蓮宗寺院の研究』	東京大学出版会	二〇〇三年一一月
6	『越後中世史の世界』	岩田書院	二〇〇六年四月
7	『中世東国足利・北条氏の研究』	岩田書院	二〇〇六年五月
8	『中世東国政治史論』	塙書房	二〇〇六年一〇月
9	『安房妙本寺日我一代記』	思文閣出版	二〇〇七年一〇月
10	『仏道・孝道・学道―三大誓願の道―』	私家版	二〇一二年三月

（主要論文）

1　越後国三浦和田氏の領主制について『越佐研究』二九、一九七〇年一〇月

2　戦国社会論ノート『かみくひむし』五、一九七二年一月

3 「色部年中行事」について『日本歴史』二八八、一九七二年五月
4 「殿中以下年中行事」に関する一考察『民衆史研究』一〇、一九七二年五月
5 足利義氏とその文書『日本歴史』二九七、一九七三年二月
8 戦国大名制の形成過程―越後国の場合―『民衆史研究』一一、一九七三年五月
9 室町期の一国人領主像『地方史研究』一三六、一九七五年八月
10 東国寺社領の構造と展開―下野日光山領を中心として―　中世民衆史研究会編『中世の政治的社会と民衆像』三一書房、一九七六年六月
11 後北条被官後藤氏について『茅ヶ崎市史研究』一、一九七六年一〇月
12 鑁阿寺文書の再検討―古河公方研究のために―『史学雑誌』八五―七、一九七六年七月
13 古河公方領に関する考察　萩原龍夫編『関東戦国史の研究』名著出版、一九七六年一〇月
14 越後応永の内乱と長尾邦景『新潟史学』九、一九七六年一〇月
15 中世東国寺社領の動向―下野鑁阿寺と武蔵戸守郷―『史誌』六、一九七六年一二月
16 北条氏照に関する考察―古河公方研究の視点を中心に―　竹内理三博士古稀記念会編『続荘園制と武家社会』吉川弘文館、一九七八年一月
17 後北条氏と古河公方足利氏の関係をめぐって『史学雑誌』八七―二、一九七八年二月
18 越後上杉謙信と関東進出―関東戦国史の一齣―　杉山博先生還暦記念会編『戦国の兵士と農民』角川書店、一九七八年一一月

19 喜連川家伝来史料考証『史学雑誌』八八―七、一九七九年七月
20 戦国期における東国国家論の一視点―古河公方足利氏と後北条氏を中心として―　一九七九年度『歴史学研究』別冊特集、一九七九年一〇月
21 古河公方家臣豊前氏の研究　竹内理三編『荘園制社会と身分構造』東京堂出版、一九八〇年一〇月
22 古河公方家臣簗田氏の研究『千葉大学人文研究』一〇、一九八一年三月
23 鑁阿寺文書覚書『日本歴史』四〇四、一九八二年一月
24 関東大草氏に関する一考察『地方史研究』一七六、一九八二年四月
25 下野小山氏代替り考『史学雑誌』九二―四、一九八三年四月
26 鎌倉府奉行人の一軌跡『古文書研究』二二、一九八三年一二月
27 戦国武将と印判　竹内理三編『荘園制と中世社会』東京堂出版、一九八四年一〇月
28 室町期新田岩松氏に関する一考察　小笠原長和編『東国の社会と文化』梓出版社、一九八五年二月
29 足利成氏論ノート―百瀬説に学ぶ―『史観』一一三、一九八五年九月
30 古河公方足利成氏に関する一考察『千葉史学』一〇、一九八七年五月
31 雪下殿御座所考『日本史研究』三〇二、一九八七年一〇月
32 鎌倉府論ノート　中世東国史研究会編『中世東国史の研究』東京大学出版会、一九八八年二月
33 室町・戦国期東国社会の一動向『歴史学研究』五七九、一九八八年四月
34 永享の乱後における関東足利氏の動向『日本歴史』四八二、一九八八年七月

35 上杉氏家臣に関する考察『古文書研究』三〇、一九八九年三月
36 関東田代氏の歴史的位置―とくに古河公方足利氏との関係を中心に―　永原慶二・所理喜夫編『戦国期職人の系譜』角川書店、一九八九年四月
37 判門田氏の歴史的位置『古文書研究』三三、一九九〇年一〇月
38 古河公方をめぐる贈答儀礼について―とくに下野鑁阿寺との場合を中心に―　戦国史研究会編『戦国期東国社会論』吉川弘文館、一九九〇年一二月
39 鑁阿寺文書伝来考証『日本歴史』五一一、一九九〇年一二月
40 十六世紀前半における江戸湾をめぐる房総諸勢力の動向―とくに品川「妙国寺文書」の禁制をめぐって―『金澤文庫研究』二八六、一九九一年三月
41 関東足利氏と房総里見氏―房総地域史研究の深化のために―　中世房総史研究会編『中世房総の権力と社会』高科書店、一九九一年五月
42 古河公方周辺の文化的諸相『三浦古文化』四九、一九九一年七月
43 東国における享徳の大乱の諸前提について『歴史評論』四九七、一九九一年九月
44 房総における天文の内乱の歴史的位置『おだわら―歴史と文化―』五、一九九一年一〇月
45 『快元僧都記』の世界像『日本歴史』五二三、一九九一年一二月
46 小弓公方足利氏の成立と展開『歴史学研究』六三五、一九九二年八月
47 上杉氏家臣木部氏の軌跡　永原慶二編『大名領国を歩く』吉川弘文館、一九九三年四月

48 東国における永正期の内乱について『歴史評論』五二〇、一九九三年八月
49 房総の中世後期における寺院と権力『日本史研究』三七八、一九九四年二月
50 室町期東国における有徳人の一様態『金澤文庫研究』二九二、一九九四年三月
51 室町後期の鎌倉・鶴岡社に関する考察『歴史評論』五三二、一九九四年八月
52 安房「妙本寺年中行事」について『史観』一三一、一九九四年九月
53 十五世紀中葉にける常陸佐竹氏の動向『日本歴史』五五八、一九九四年一一月
54 有徳人鈴木道胤についての覚書―とくに日親『伝灯鈔』の検討を中心として―　峰岸純夫・村井章介編『中世東国の物流と都市』山川出版社、一九九五年一一月
55 上総大坪基清試論『国語と国文学』八六五、一九九六年一月
56 安房妙本寺の中世墳墓に関する考察『千葉県史研究』四、一九九六年三月
57 安房妙本寺日我の歴史的位置『歴史学研究』六八四、一九九六年五月
58 中世寺院における修学の歴史的性格『千葉県史研究』五、一九九七年三月
59 里見義通試論『千葉史学』三〇、一九九七年五月
60 下総葛西地域における上杉氏家臣の軌跡『埼玉県史研究』三三、一九九八年二月
61 古河公方とその周辺『千葉県の文書館』三、一九九八年三月
62 安房妙本寺と房総里見氏『千葉県史研究』六、一九九八年三月
63 武州品川鳥海氏とその周辺『日本歴史』六〇一、一九九八年六月

64 房総における簗田氏領の歴史的位置『千葉史学』三三、一九九八年一一月
65 戦国期東国における戦乱・飢饉と法華僧『歴史学研究』七一八、一九九八年一二月
66 上杉氏家臣菊地氏に関する考察『おだわら―歴史と文化―』一二、一九九九年三月
67 小泉次大夫吉次の歴史的位置『千葉県史研究』七、一九九九年三月
68 安房妙本寺日要の歴史的位置『日本歴史』六一八、一九九九年一一月
69 中世東国の法華宗寺院における住持と隠居『千葉県史研究』八、二〇〇〇年三月
70 中世東国における一連歌師の軌跡『金澤文庫研究』三〇五、二〇〇〇年一〇月
71 東国における日蓮宗寺院の中世的展開『千葉県の文書館』六、二〇〇一年三月
72 古河公方足利義氏論ノート『日本歴史』六四六、二〇〇二年三月
73 「皇国史観」登場の歴史的前提―近代史学史ノート―　安田浩・菅原憲二編『国境を貫く歴史認識』青木書店、二〇〇二年九月
74 影写本「越後下文書」成立の経過と由来『古文書研究』五六、二〇〇二年一一月
75 安房妙本寺日我と里見義堯『千葉県史研究』一二、二〇〇四年三月
76 小弓公方足利氏と房総正木氏の関係について『六浦文化研究』一二、二〇〇四年五月
77 里見忠義の家督相続・元服前後の動向について『千葉県史研究』一三、二〇〇五年三月
78 下総臼井・小弓城主原胤栄に関する覚書―高野山「西門院文書」を中心に―　千葉城郭研究会編『城郭と中世の東国』高志書院、二〇〇五年一一月

79 中世東国における版刻花押について『千葉県史研究』一五、二〇〇七年三月
80 室町・戦国期の下野小山氏に関する一考察―特に小山大膳大夫家を通じて―　佐藤博信編『中世東国の政治構造』岩田書院、二〇〇七年六月
81 東国大名里見氏の歴史的性格―支配理念の側面から―　佐藤博信編『中世東国の社会構造』岩田書院、二〇〇七年六月
82 足利尊氏・同直義所領目録（「比志島文書」）をめぐって―上総所領の復元―　『日本史研究』五四二、二〇〇七年一〇月
83 古河公方家臣本間氏に関する考察『茨城県史研究』九二、二〇〇八年二月
84 室町・戦国期の下野那須氏に関する一考察『戦国史研究』五五、二〇〇八年二月
85 古河公方家臣簗田氏に関する一考察『千葉県史研究』一六、二〇〇八年三月
86 上総藻原郷・二宮庄・藻原寺の中世的展開『千葉城郭研究』九、二〇〇八年一〇月
87 豊前氏と下総千葉氏―特に鷹・隼の贈答をめぐって―『千葉いまむかし』二二、二〇〇九年三月
88 上総藻原寺檀那松本久右衛門家所蔵史料について『日蓮仏教研究』三、二〇〇九年三月
89 戦国期の関東足利氏に関する考察―特に小弓・喜連川氏を中心として―　荒川善夫・佐藤博信・松本一夫編『中世下野の権力と社会』岩田書院、二〇〇九年五月
90 安房妙本寺日我と日向法難―特に二通の日我書状から―『興風』二一、二〇〇九年一二月
91 常総地域史の展開と構造―特に室町・戦国期を中心に―　『中世常陸・両総地域の様相―発見された井田文

書―』茨城県立歴史館、二〇一〇年三月

92 安房妙本寺と和泉堺本伝寺―新出史料の検討―『日蓮仏教研究』四、二〇一〇年三月

93 安房妙本寺日我と『立正安国論私見聞』『日本歴史』七四七、二〇一〇年八月

94 古河公方足利義氏と東国―特に「葛西様」段階を中心に― 葛飾区郷土と天文の博物館編『葛西城と古河公方足利義氏』雄山閣、二〇一〇年五月

95 安房妙本寺学頭坊歴代考―日朝から日成まで―『興風』二二、二〇一〇年一二月

96 中世東国寺社領の成立と展開『歴史評論』七三五、二〇一一年七月

97 安房妙本寺門流の展開と日向『興風』二三、二〇一一年一二月

98 戦国期佐倉千葉氏の権力形態『千葉大学人文研究』四一、二〇一二年三月

99 古河公方の自筆文書に関する基礎的考察―古河公方研究の深化のために― 佐藤博信編『関東足利氏と東国社会』岩田書院、二〇一二年三月

100 房総里見氏の花押と印章―義堯から忠義まで― 佐藤博信編『中世房総と東国社会』岩田書院、二〇一二年三月

【主要編著・共著・史料集】

1 『茅ヶ崎市史一資料編（上）古代・中世・近世』茅ケ崎市刊、一九七七年一〇月

2 『古河市史資料中世編』古河市刊、一九八一年三月

3 『茅ケ崎市史四通史編』茅ケ崎市刊、一九八一年三月
4 『東国大名戦国大名論集三』吉川弘文館刊、一九八三年九月
5 『古河市史通史編』古河市刊、一九八八年三月
6 『埼玉県史通史編二中世』埼玉県刊、一九八九年三月
7 『小田原市史史料編中世Ⅰ～Ⅲ』小田原市刊、一九九一年三月
8 『千葉県の歴史資料編中世一～五』千葉県刊、一九九七年三月
9 『小田原市史通史編原始・古代・中世』小田原市刊、一九九八年三月
10 『戦国遺文古河公方編』東京堂出版、二〇〇六年四月
11 『千葉県の歴史通史編中世』千葉県刊、二〇〇七年三月
12 『戦国遺文房総編』東京堂出版、二〇一〇年五月～

【主要小論】

1 『図録日蓮聖人の世界』をめぐって『歴史評論』六二二、二〇〇二年二月
2 東京国立博物館「大日蓮展」に思う『歴史評論』六三八、二〇〇三年六月
3 日向参詣記『千葉大学人文研究』三六、二〇〇七年三月
4 岡山・鳥取研修記『興風』一九、二〇〇七年一二月
5 『興風』と『日蓮仏教研究』『歴史評論』七〇四、二〇〇八年一二月
6 「鎌倉の日蓮聖人―中世人の信仰世界―」『歴史学研究』八七〇、二〇一〇年九月